

週日の説教

金 大烈 神父 2010年8月4日(水)

《信仰と命を得られました》

主の平和

私が日本語で読んだ初めての小説は氷点でした。氷点を書いた人は三浦綾子さんですね。彼女の人生については皆様もご存知だと思います。さまざまな病気のために24歳から寝たきりの人生を過ごさなければならない状態の人でした。そして信仰を受けました。42歳の時に朝日新聞社が募集した懸賞小説に「氷点」を投稿して入選し、朝日新聞の朝刊に「氷点」が連載されたのでしたね。間違っていないですか。(笑い)

とにかく、三浦綾子さんが遺言のような言葉を残しているのですが、遺言として残したのではなく、結果的にそのようになったものです。その言葉は、韓国語で訳されたものなので、私が正確には伝えられないと思いますが、その当時、結構感動したのです。「私は病によって健康を失っただけです。その代わりに信仰と命を得る事が出来ました。」という言葉で、印象深く覚えています。

結局、私達が不幸を乗り越えられる力は何でしょうか。それは信じる事ではないでしょうか。私達は若い時には自分の拳を信じてきたかも知れませんが、その拳は何もないものですよね。頭が優れているとプライドをもっていたものも、その頭のなかにある世界は、時間が経てば経つほど、「こんなに狭い世界だったのか。」と認めなければならないのが私達の人生です。

私達は色々な光によって信仰の生活をし、今ミサに与っています。私達はやはり、信じる事に希望をおきます。希望も逆に言いますと信じる事がなかったら出来ません。全ての限界を乗り越えられるその希望、希望は信じる事によって出来る。それは私達がいつも意識しなければならないと思います。

彼女がかかった病の種類は幾つあったかご存知ですか。6つでした。それもみな、癒されない重い病気でした。24歳といえば人生で一番美しい時でしょう。その年齢から寝たきりになって、どのくらい悩んだのでしょうか。どのくらい辛かったのでしょうか。そのような状況で“彼女が出会ったのはイエス様”でしたね。その辛い過程を通して、その苦悩の中から素晴らしい作品が出来たと私は思います。

彼女が残したこの言葉、「病によって失ったのはただ、健康です。しかし、その代わりに私は信仰と命を得られました。」ここでのポイントは命です。「命を得られました。」一般的に私達は命を失います。病の最後は命を失う事です。そういうことで恐れる事です。しかし彼女ははっきり言いました。「信仰と命を得られました。」彼女の言う命が何であるかを私達は知っています。

私達もイエス様が見せて下さった、約束して下さい、その御国の事だけではなく、今現在、“私達はその御国の生き方をしなければならない”という強い意思が必要だと思います。私達の口から「信仰と命を得られました。」と自然と告白が出るようになったら何の心配もないと思います。

ありがとうございました。